

N 人々がゆっくり歩いているのです。オープニングに使われます。

このような曲を聴きながらオープニングを考えるのです。そうするとここはゆっくり歩けばいいのだなあ。ではこの美しい曲に何をしようか。ああ、そうだグラインダーで火花を落とそう。そうするとこの美しさにちょっと違うイメージが。美しいが鉄をギョーと削っている4台の火花が橋の上からビーと落ちてくる。そうするとメロディの美しさに負けないかな。緩やかな速度で人が歩けばいい。よし小さい人を探そう。ではゲタを履こう。というように、イメージが音に触発されて逆の方に向けようとしていたりして、いろいろなことが出てくるのです。

M 蛭川さんの中ではこれはとてもきれいだったんですね。僕はこれでもわりと音を濁している感じというか、シヨパンのようなきれいな感じだと思って作っていましたが、カセットテープをお聴かせした時に、「宮川くん、きみ才能があるんだ」と言われました。(笑い)

N 僕、そんなこと言ったの？

M なんか、それでフリーパスを頂いたような気持ちになりました。これでは好きに作っていいというお許しを頂いたような。調子に乗って、わかりやすさを目指してきれいな曲を作り続けたら、2曲目からいい顔をなさらなかった。

それで「こんなきれいな曲ばかりだと僕は天井から腐ったナスでも降らさなければならぬよ」と言われました。そこで「そうか演劇は対比なのだ」と少しわかったのです。「ああそうか、これはきれいで、ビジュアルだと、めちゃくちゃ汚くしてくるのだ。だから藤圭子さんのしゃがれた声というものを欲しているのだ」とわかりました。そ



## 僕は『身毒丸』以降、

ここで、「ではこういう曲はどうですか」と私が言った時の蛭川さんはとても嬉しそうでした。そのナスの理論は僕にとっては未だに忘れません。

N 自分の性格からそれはすごくわかります。きっとそう言うと思います。

M ただそれだけだったら『身毒丸』の音楽は多少小ぶりに成功していたと思います。それが稽古初日に限って、巨匠がもう一人いらっしゃいました。それは誰かという主演の武田真治の事務所、ホリプロの堀威夫さんです。僕がナス理論で頭がいっぱいの時に、帰り際の出口の所で「宮川さん、一つ(ミュージカル『Cats』の)『メモリー』のような曲を作ってね」と、全く別な世界から言うのです。“ナスでメモリーで藤圭子かよ”みたいな、もう逃げ場があの時はなくなりました。寺山さんが大きく立ちはだかっけていて、これまでの所にも帰れないし、そこで、その二つのヒント「メモリーで、すごく汚い」ということのミックスしたのが僕の中ではある種のノスタルジーだったのです。

自分にとってのノスタルジー、ノスタルジックというのは悪いことだと思っていたが、それって、みんなに共通することで、メモリーで、しゃがれて、腐ったナスにも対抗するようなおいしいエリアだったのです。つまり子守歌を作ろうと思い、後の十数曲を作っていたのです。

～ピアノ演奏～

これ哀しいでしょう。

N 「お母さん!」というセリフが入ってくるんだよ。「お母さんもう一度僕を生んでください」とか。

M この曲、今でも大好きです。なんか泣けるでしょう。(拍手)

自分の中でそれが芸術でもあり、俗っぽくもあり、つまりきれいでいて汚くて、わかりやすくてわかりにくいというように全部が入っているノスタルジックという封印していたエリアがそこにあったのです。

## 『身毒丸』が、その後の蛭川にビジュアルを復権させた

N 僕は『身毒丸』以降、演出が変わったのです。なにをやってもいいのだ。そしてビジュアルにもっと凝ろうと思いました。一時それを放棄して、骨だらけの演出をしていた方が批評家に評判がいいのです。あれをやってから「僕はいいんだ。ちゃんとビジュアルを復権しよう」と思い、あれから変わって、それまではちっと途絶えていた仕事ができるようになりました。

M 『身毒丸』でも、家が出来ていくなんで。貴重な1時間半の中の



## 演出が変わった

## 封印していたエリアがそこにあった

それに5分半ぐらい割いているんですものね。

N 家というのはお父さんがいて、お母さんがいて子供がいるから家であって、そのために亡くなったお母さんの代わりに、新しいお母さんを買ってくるわけですね。そして家の形を作るわけですね。お母さんを買って大通りを歩いて、ターンする。本では往来から次のシーンは座敷になるのです。道を歩いていて、そこから玄関が出てきて、中の廊下とか、仏壇の間とか、居間になって、ご飯を食べる台所になってと、セットがどんどん出てきて、一軒の家が(舞台上に)できてくる。お母さんを買ったことによって精神的スタイルとしての家もできるが、物質的な構造的な家も出来上がっていくという演出になっています。これが結構冴えているのです。

M そういうのを自画自賛というのですよ。(笑い) これが出来た日を克明に覚えていますよ。とにかく最初のシーンが未完成だったかもしれないが、ここは何か音楽が入るでしょうと言われたのです。僕が用意してきた「トントン、タンタン」という歌舞伎の付け打ちみたいなリズムと蛭川さんの考えていた家の組み立てが「はい。用意。歩くよ」「エイ、歩く」「ドンドン、タンタン」となったら、そのまま5分間止まらないで今のシーンが出来たのです。あれはすごいセッションでした。

N 打合せナシでやっていました。「何々の間が出てくる」、「四畳半」「六畳」「板の間」とみんな大騒ぎして……。

M あれが蛭川組というのですよね。みんなが右往左往して

N 本当にあれは至福の時間で、良い作品でした。

宮川さん、話は違いますがNHKでお人形さんを使ったりしている番組をたまにみますが、あれはどういう内的必然性ですか。

M あれは声を掛けていただきました。『クインテット』という番組なんですけど、音楽家の僕が見て楽しい番組を作ってくれとプロデューサーがおっしゃったのです。「音楽の向こうに何か大事なことが隠されている、この番組はそれを写すのだ」ということをテレビ局の方から言ってきたのです。これは嬉しかったです。

N これは面白いです。ちょっと感動的で、僕は大好きです。実はライブでそういうことをやるような日がきたらここでやって欲しくないかなと思っています。あれこそ最高のエンターテインメントであり、子供たちがあれをみたらよい体験だと思います。大人が見ても面白いです。

M あれを教育という所に逆に僕は一石投じているつもりなのです。エンターテインメントにも一石投じたいし、教育もです。子どもに媚びるのではなくて、こちらが熱中することが教育ではないかということです。

N これは宮川さんにすごく合っていると思います。宮川さんは子どもと大人が混ざっているようなそんな所があります。

M それに蛭川さんが合うのね。蛭川さんもとても坊やでもありで。

2006.6.3 彩の国さいたま芸術劇場 映像ホールにて



『身毒丸』の映像も流れ、家が組み立てられるシーンなどを、音楽とともに鑑賞。

